

広島平和記念資料館
令和5年度第2回企画展

ともだちの記憶

期間 2024年3月1日(金)ー9月10日(火)

発行 広島平和記念資料館 学芸課
〒730-0811 広島県広島市中区中島町1-2
TEL 082-241-4004 <https://hpmmuseum.jp/>



梅北さんと石崎さんの日記 (左)梅北美智子寄贈
当時12歳・当時13歳 (右)植田規子寄贈
爆心地から800mで被爆 土橋付近

1 ともだちとの日々

広島第一県女の石崎睦子さんと梅北トミ子さんは、同じ1年4組でした。入学した翌日、学校から日記帳が配られました。表紙をめくっていくと、記載上の注意が書かれています。

“『今日の一日』それは私共の再び経験することのない尊い一日であります。一日の生命は一日の向上でなくてはなりません……”

希望に胸をおどらせ入学した少女たちですが、警報が鳴るたびに授業は中断し、勤労ほうしで作業に明け暮れる日も続きます。お腹もいつもペコペコです。

それでも、友達と過ごす日々は、かけがえのないものでした。

はじめに

ヒロシマを生き残った中学生には、死んだ友達に対する後ろめたさのようなものがあります。街を歩いているとき、愛する人と手をつないでいるとき、子や孫の成長を目にしたとき、親の老いを感じたとき、ふっとあの日のことがよみがえってくるからです。

今回のきかく展では、遺品や絵・証言により、少年少女の生死を分けた状況や、生き残った生徒の苦しみや負い目、そして友を思い、鎮魂の願いを込めて残した記録を紹介いたします。彼らが残した友達の記憶を知っていただくとともに、友達を思う気持ちにふれていただければと思います。

展示構成

- 1 ともだちとの日々
少女たちの日記
8月6日の朝
- 2 生死をわけて
友達と一緒に亡くなる
消えた友達
友達を亡くす
友達に助けられる
友達を助ける
友達と逃げる
友達を助けることができなかった
- 3 生き残って
友達の安否
手作りの慰霊碑
広島初の追悼文集
癒えない傷
負い目の日々
消息を追って

四月六日

一生に一度しかない女学校への入学式で私も一人前の第一級女の生徒となることができた。一日でも早く皆さんと仲よくしたい。(石崎)

四月九日

学校の黒板に、一年生は明日から勉強があることになったと標してあった。帰ってあちこちと本をたずねた。三・四人聞いてもなかったが、ようやく今年二年生で市女へ行く人に借りた。(梅北)

四月十日

今日からいよいよ授業がはじまった。女学校へ来るのが楽しくてたまらない。(石崎)

先生がぐるぐるかわられるのでへんな気持ちでした。お友達もたくさん出来た。(梅北)

四月十三日

訓練の最中、皆さんが後をむいておられるので後ろをむくと、屋根のところからづーと飛行雲をひいてB29がゆうゆうと広島の上空を旋回している。(石崎)

五月十四日

今日は学校へ行こうと思って途中まで行くと警報が出たので帰って又出なおした。学校へ行くのに(明治橋の)集まる所まで二十分近くかかるので、皆をまたせるような気がして、とても気にかかる。大人のように早く歩けるようになりたいと思う！(梅北)

五月十七日

今日から四日間、さいばん所の前の疎開後のせいりをした。皆、しゃべるや鍬を、すっとなすっとなと重そうに持ってきた。帰ってご飯をたべて立つと、足がとても痛かった。(梅北)

私は目ぼが出来てよく見えないので、校内作業をした。私一人であったので大へんさびしかった。家に帰ると少し疲れが出たが、みんなの方が疲れていらっしやるのだと思うとなおった。(石崎)

六月九日

先生がつぎの日曜にクラス会をすると言われた。私は友達ととき隊をする事にした。早くみんなのが見たいと思った。学校でみんなと遊ぶのがとても面白いので、行くのがまちどおしい。(梅北)

六月十日

クラス会の時のれんしゅうをした。よく出来てうれしかった。石崎さん達と「よかったね、よかったね。」と言いながら、すみ吉橋のところで行かれた。(梅北)

六月十二日

月曜日から、夏服を着る事になったが、白い服を着るのは、防空上禁止されて、とても長いのにする事になった。(梅北)

六月十七日

今日はいよいよおまちかねのクラス会です。授業後、みんな仲よく昼食をすませ、一番最初の御製ろうしやをやる時、先生が用で出かけられたので、みんながさわいっていると、宮本先生がこられて注意された。そしてこんどは静かにまわっていると、警報発令になったので、いそいで下校した。(石崎)

六月十八日

練兵場開こん作業。今日から夏服を着て行った。色とりどりで大へんおかし。(石崎)

土がとても固いので作業もつらい。お腹がすくので、お昼が待ち遠しい。岩佐さん達はまだ少ししかしないうちに「そろそろ昼じゃね。今日のおかずはじゃがさんじゃ」とふざけて言われる。(梅北)

六月二十八日

今日、寺岡さんがてんこうされた。私の組も、大分人がへって来た。(梅北)

七月六日

八木修練道場へそかいの荷物をさげていった。片道三里というながい路を、本を三冊を交たいでさげていった。大へんつかれた。(石崎)

いよいよ三十分で着くというので、又元氣を出して出発した所、大雨にあった。傘はもっていたが友達を入れたので、ずぶぬれになってしまった。(梅北)

七月十二日

みんなが警報のまねをしていると、本ものの警報がなったので、大いそぎで下校した。(石崎)

七月二十日

五校時、体操(国民体操の試験)。それがすんで、手旗の練習をすることになったので、梅北さんと二つしよにした。(石崎)

七月二十四日

今日は朝六時半頃から警報が発令され何度警報になったかよくおぼえていない。今日はこんな風で一日中家の中にかくれていた。学校へ行かない日ほどたいくつな日はない。(石崎)

七月二十五日

九時少し前に解じよになったので学校へ行った。途中、石崎さんの隊につかせていただいた。行ってみんなに会った時、久しぶりに会ったような気がした。これれなかった人がだいたいあった。(梅北)

八月四日

明後日は月曜日、十四日まで、そかいの片付けに行く。今の気持ちでしょう。(梅北)

八月五日

午後小西さんと泳ぎに行った。私はちっともよう泳がないのにみんなよく浮くと思うとなさげなかった。今日は大へんよい日でした。これから一日一善と言うことをまもろうと思う。(石崎)



切明千枝子さん作
県立広島第二高等女学校4年生
爆心地から1.9kmで被爆 比治山付近

2 生死をわけて

当時15歳だった切明千枝子さんは、8月6日の空が忘れられないと言います。

西の空は真っ赤なのに、東の空は一面の星空で、一晩中たくさんの星が流れていたそうです。切明さんはその星々を見ながら、死んだ先生や友達のことを思いました。

あの日、少年少女たちに何が起こったのでしょうか。身に着けていた衣服や、目にした光景から、被爆直後の姿を伝えます。

8月6日の朝

「あっ、B29の音がする！」



松原美代子さん作

当時12歳
広島女子商業学校1年生
爆心地から1.4kmで被爆 鶴見町

親友の船岡さんが、「あっ、B29の音がする！」と叫んだのです。空を見上げると、北西方面に去ろうとする飛行機がかすかに見えました。

友達を亡くす

高橋昭博さん作

当時14歳

広島市立中学校2年生

爆心地から1.4kmで被爆 中広町

私のうしろから、いつのまにか級友の山本
きていた。二人とも手や足の皮がむけてた
ボロボロに焼きちぎれていた。山本くんは「お
「おかあちゃん」と泣いていた。私は自分
するほど意識はしっかりしていた。「泣くな!」
と言って山本くんを叱り、励ました。

くんがついて
れ下り、服は
かあちゃん」
でもびっくり
「しっかりしろ」



山本道也・西島朱実寄贈

山本達也くんの学生服

当時14歳

広島市立中学校2年生

爆心地から1.4kmで被爆 中広町

高橋さんと山本くんは学校の校庭で被爆
しました。山本くんは、途中で高橋さんと
はぐれてしまい、通りがかった人に助け
られて、なんとか家に帰りつきましたが、
9月16日に亡くなりました。



友達と一緒に亡くなる



谷口勲くんと西本朝彦くんの学生服

当時13歳・当時12歳 県立広島第二中学校1年生

爆心地から600mで被爆 中島新町

(左)谷口順之助寄贈
(右)西本浅男寄贈
西本まさえ寄贈

2人は建物そかい作業現場で被爆し、谷口くんのお父さんとお兄
さんに見つけられました。谷口くんは、「西本も連れて帰って
くれえ」と頼みました。お父さんとお兄さんは2人を背負って家に
連れて帰りましたが、翌日2人とも亡くなりました。

消えた友達



関岡敏子さんの帽子とかばん

当時13歳 県立広島第一高等女学校1年生

爆心地から800mで被爆 土橋付近

脇谷愛子寄贈

関岡さんは、建物そかい作業現場で被爆し、頭から血を流しうず
まっていた。友達の三好さんが「いっしょに逃げよう」と言
いましたが、関岡さんは「私はダメだから早く逃げて」と言
いました。その後の関岡さんの行方は分かっていません。家にたどりついた三好
さんも、関岡さんのお母さんへ伝言を頼んだ後、息を引き取りました。



和田耕治さん作

当時12歳

県立広島第二中学校1年生

爆心地から1.91kmで被爆 西観音町二丁目

3 生き残って

かろうじて生き残った中学生たちも、心と体に深い傷を負いました。

学校にもどれず退学したこと、原爆病に倒れたこと、中でも一番つらかったのは、友達のお父さんお母さんに会うことでした。

昨日まで、机を並べて勉強し、作業にはげんだ友達との別れは、彼らの心に深い根を下ろし、何十年経っても忘れることはできませんでした。

友達と逃げる

立畑秋郎さんの
当時14歳
松本工業高校3年生
爆心地から1.65kmで被爆

ゲートル

鶴見橋



立畑アキコ寄贈

立畑さんは建物その中に被爆しました。と正田くんが、真つて来たので、「顔が言ったら「お前も」と言われ、お互いしました。あちこち中、3人は家に帰めました。

かい作業の点呼友達の埜森くん黒な顔で近寄つて来たので、「顔が焼けてとるで」とや、お前もじゃに指をさしあいから火が上がるため歩きはじめ

友達を助ける ことが できなかった



吉山正子さん作

当時13歳 女学校1年

爆心地から1.5kmで被爆 鶴見町

「吉山さーん イタイヨー イタイヨー」

森川さんの声がいまだに耳に残ってはなれない。

自分の体の燃える熱さを川の水にひたすことが精一杯でした。

友達に助けられる

隅本陽子さんの制服ともんぺ
当時12歳
県立広島第二高等女学校1年生
爆心地から2.3kmで被爆 尾長町



本人寄贈

隅本さんは、東練兵場で草取りをしている最中に被爆しました。大やけどをおい、この制服ともんぺは、友達のリュックに詰めてもらいました。そのうち歩くのもつらくなり、友達がくんでくれた水を飲んで、友達に抱えられて救護所へ行きました。それからまた友達に支えられながら、学校へ向かいました。

友達を助ける

樽本観さん作

当時13歳

広陵中学校2年生

爆心地から1.71kmで被爆 比治山

同級生をほりおこしているのは私



手作りの慰霊碑



にしおか せいご
西岡誠吾さん作

当時13歳

県立広島工業学校1年生

爆心地から2kmで被爆 千田町三丁目

「建物疎開作業に行った者はみんな死んでしまった」と言われ愕然としました。翌年2月の寒い朝、担任の先生と生き残りの生徒10人位が慰霊碑を建てました。慰霊碑は倒れた校舎の柱を切って造りました。作業現地では、級友のボタンや弁当箱など遺品を拾い集めてご遺族へお渡ししました。

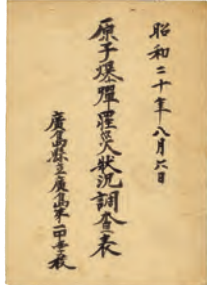
広島初の追悼文集



『泉 第一集
みたまの前に捧ぐる』

1946年、広島で初めて発行された被爆体験文集は、友達を追悼するものでした。県立広島第一中学校と県立広島第一高等女学校の生徒39人が、ぎせいとなった一中の35学級の生徒のために、手記を寄せました。

癒えない傷



昭和二十年八月六日
原子爆弾罹災状況調査表

1947年に、県立広島第一中学校に在せきしていた職員や生徒の原爆被害を調査した資料です。生徒27人、職員6人の被爆場所や原爆しょうのしょう状などが記されています。一中では、生徒たちが自ら立ち上がり、こうした学友の健康管理にあたりました。

広島国泰寺高等学校寄贈

亡き友よ、
どんなにか、
熱かったろう
どんなにか、
痛かったろう
どんなにか、
苦しかったろう



西岡誠吾作

ふるたみ ちえ
古田美知枝さんの

安否をたずねるはがき

親しい友の古田さん 貴女は広島でどうでしたか。私は貴女が無事かどうか心配で心配でなりません。すぐお返事下さい。まって居ます。

坂本哲子 昭和20年10月2日出

古田さんは動員先で被爆し、8月10日に亡くなっていました。親友の坂本さんは、古田さんの死を知らずに、安否をたずねたのでした。



古田眞喜子寄贈

友達の安否

たま がゆう こう
玉川祐光さんの証言より
当時13歳

県立広島第二中学校1年生
爆心地から1.9kmで被爆 松原町

加納くんのお母さんが、私に「うちの息子はどうしたか」と何度も聞きました。私は答えようがなく、なぜ生きて帰ったのだろうかという気持ちがありました。



加納昭代寄贈

かのう ふみ はる
加納文治くんの
教練教科書入れ

おわりに
原爆が友の肉体をうばっても、友情まで別つことはできませんでした。

何十年経っても友達を思うとき、彼らは制服をきた少年少女にもどるのです。

最後に、生き残りのひとり、当時広島市立中学校2年生だった石田晟さん(当時13歳)の言葉を紹介します。

—亡き友に捧げる—
あなたをさがして

慰霊碑の前で額つき、今でも私たちは、香華のむこうのあなたをさがしています。

慰霊碑に積重ねられた山石の一枚一枚が、あなたがたの霊のように思えます。

消息を持たない父に母に、せめてあなたがたとの出会いの場所をと願っています。

どうぞ慰霊碑のまわりにて下さい。

きっと合えます。

あなたがたのお父さん、お母さんが亡くなられた時、私どもが死んだ時、きっとあなたがたに会える、その時は皆で庚午町で作ったさつまいものこと、大釜で蒸したいものを、先生が教室で食べるようにすすめられたけど、細いすじいものを食べて残りを家に持帰って家族と分けて喜んで食べた、あの頃のこと、木銃をかついでの通学、研心の間での正座、雪の朝のはだしの朝礼、可部町の水害復旧のもっこかつぎ、戸坂浄水場の銀シャリ、なつかしい先生・授業中の沢山の思い出をゆっくり話しましょう。

(市中同窓会編『鎮魂』より)

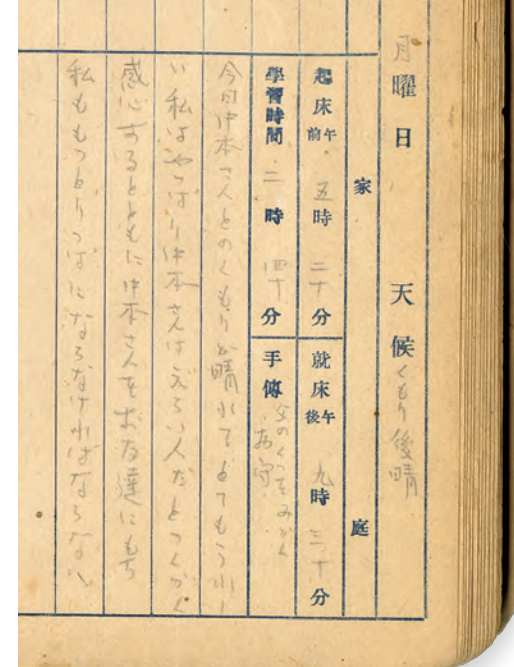
石堂さんのことを歳が経つと
忘れていくかなと思っていきましたら、
一年ずつ生きていくうちに、
だんだん忘れられないことを教えられたんです。

梶山雅子さんの証言より(旧姓・中本)
当時12歳 県立広島第一高等学校1年生
爆心地から1.7kmで被爆 金屋町

負い目の日々

石堂郁江さんの日記

四月二三日
今日中本さんとのくもりが晴れてとてもうれしい。
私はやっぱり、中本さんはえらい人だどつくづく
感心するとともに、中本さんをお友達にもち、
私をもっとりっぱにならなければならぬ。



石堂直哉寄贈

消息を追って

崇徳中学生の被爆追跡記録

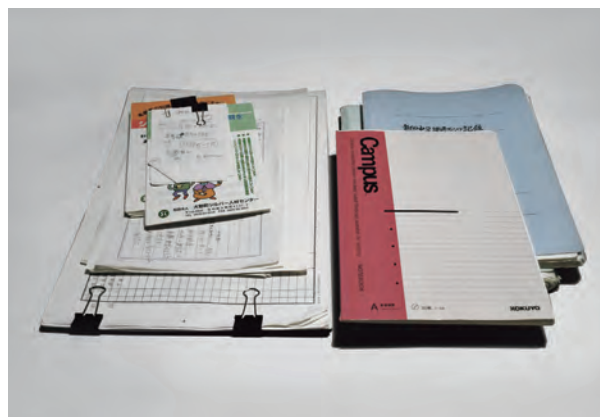
竹村伸生さんの手記より

当時12歳

崇徳中学校1年生

爆心地から800mで被爆 八丁堀

知って生き返るわけじゃないけど、
遺族は知りたい。
同窓生の最後を調べようと思
立ったんです。



竹村蘭子寄贈